

京都橋大学  
地域連携センター

つながる Vol.6

つながる

CONTENTS

Interface 実践の知 第6回

山科盆地を縦断した石垣石材  
—伏見城と山科(大塚・小山)石切場を  
つなぐ山科川

一瀬 和夫 本学文学部教授

山科カレッジ～山科をまなぶ～開催報告  
京都橋大学、山科区

第3回橋セッション

醍醐地域との連携を考える  
—文化・観光・まちづくり—

長瀬 福男 総本山醍醐寺真言宗醍醐派宗務本庁公室室長

中井 秀和 京都市伏見区役所醍醐支所地域力推進室  
まちづくり推進課長

谷 亮治 本学客員講師、京都市文化市民局地域自治推進室  
まちづくりアドバイザー

京都モダニズム建築を訪ねて 第16回

淡交社ビルヂング

河野 良平 本学現代ビジネス学部准教授

Interview ともに 第6回

人が集う“まち”と駅を、もっと楽しく、もっと元気に！  
学生と地下鉄の駅のコラボレーションが生み出すアート空間

吉田 治英 株式会社 GK 京都相談役、京都精華大学客員教授

水川 耕児 京都市交通局高速鉄道部営業課営業推進係長

06



## 山科盆地を縦断した石垣石材 —伏見城と山科(大塚・小山)石切場をつなぐ山科川

一瀬 和夫 Ichinose, Kazuo

本学文学部教授

昨年11月29日に、武内良一さんをはじめとする、やましなを語りつぐ会や車石・車道研究会、城郭談話会、ふるさとの会の方々と橘大の裏山になる行者ヶ森に登った。むろん、学生もいっしょであり、それに卒業生らも。さらに、芦屋市教育委員会で長年、徳川大坂城の石切場を研究する森岡秀人さん、奈良文化財研究所や長岡京市教育委員会の瀬戸内海の石切場の調査にたずさわる人もいっしょだ。

橘大の裏山には巨石がごろごろしている。北隣りには岩屋神社がある。この名がしめすとおり山全体は岩だらけなのだ。ところが、今のところ橘大近辺の斜面にはこの一行にとっての目的の石はない。その石とは武内さんたちが大名石と言って戦国末から江戸時代にかけての大名が刻んだ刻印石。これにくわえて巨石を一直線に割ろうとして設けた矢穴の列や矢穴の痕がつく石のことである。

この巨石探索の地元調査グループの踏査は、ふつう、行者ヶ森の山を東から北に巻くようにして流れる山科・音羽川沿いにある白石神社からはじめるのが初心者向きという。この神社にはかつて白く輝いたという巨石がまつられる(写真1)。その石にも矢穴がある。武内さんらに引導された29日に訪れたとき、学生の一人が新たな刻印の存在に気がついた。一に〇、よこに二がつくかもしれないものだった。今まで何度となく訪れていたのに見つからなかったという。刻印は光線のかげんで見やすさがかなり違う。多くの目で見るとまだまだ確認できそうだ。

この神社周囲で地元の人たちはこの大名石なる刻印石を長年にわたって調査する。特に、山科のなか

でも小山と大塚の山中で見つかり、山科とか、小山・大塚石切場と呼ばれる。ふるさとの会の中川亀蔵・久保孝・武内良一さんらは『伏見城関連山科(大塚・小山)石切場』という研究レポートをまとめた。

今回見つかった刻印は石切丁場での採石グループをしめしている。このばあい、一文字一星は毛利家の家紋略式刻印であり、「二」はその編成家臣団四組をさす。このほかにも山科の石切場では四角のなかに・の平四つ目結刻印や隅(角)立四つ目結刻印がみつかると。若狭京極家所用かどうか。目下調査中である。前者が石英斑岩、後者が玄武岩質凝灰岩の分布地帯で石材自体も区別されたと森岡さんはみる。

さらに一行は雨の中、山科・音羽川をさらに上流に導かれた。橘大からすれば、行者ヶ森のちょうど裏、音羽山にはさまれた川谷の岸にある石に矢穴があった。大きな楕円形の平面形のもので、底は舌状になる。矢穴の型式学からすれば、文禄期にもさかのぼるものである。今度はやや川を下って、地元の



写真1：白石神社の巨石

方々が石の集積場ではなかろうかという地点から行者ヶ森の頂上を目指した。途中でクレーター状の採石坑があり、石には矢穴がついていた。これは慶長期か。頂上手前にある巨石には丁場割して占有をしめす一文字一星の刻印が見られた。その周囲、下方にむかっては、矢穴が残るたくさんの切石の残材があった（写真2）。

こうした切石はどこに運ばれたのだろう。一番の候補地は矢穴で石を切ることが盛んになった関ヶ原合戦前後、徳川再建の伏見城石垣である。山科の石切場からは12kmほどはなれる。当時の伏見は淀川の水運の拠点として京都の外港都市であった。石切場はそこから最短で近江に抜ける中間点になる。

文禄3年（1594）、豊臣秀吉はそれまでであった伏見屋敷を増築して伏見城（指月城）を築いた。しかし、1995年の阪神淡路大震災のときと同じ活断層が慶長元年（1596）に激震した。これによって倒壊した。ただちに丘陵上へ第2次伏見城（木幡山城）が再建された。この頃の矢穴もわずかであるが見つかっている。第2次のもは関ヶ原合戦によって破壊されたが、徳川家康が再建した。矢穴がある石はこれにともなうものが多い。元和9年（1623）の廃城後、石垣の石は淀城や徳川大坂城に転用されたであろうことから、山科の石切場からの石はそちらにも動いたことになる。

今では、本丸天守台は明治天皇陵の敷地内にあり、徳川築城期のものがこのころ。三の丸南辺から四の丸にかけて2007年の下水道工事が出た刻印や矢穴のある石垣石が参道脇に展示される。この石は元和から寛永の徳川家光による廃城のものかと宮内庁は推測する。矢穴は慶長期にさかのぼってもいいものもある。近鉄桃山御陵前駅近くの御香宮神社にも矢穴のついた石が集められる。これらの石と石切場との関係が気になる場所である。明治天皇陵の南にある京都橘高校の敷地はもちろん、伏見城の範囲にあたる。馬出しとその濠とされ、伏見城に関わる金箔瓦などの出土品は高校で展示される。

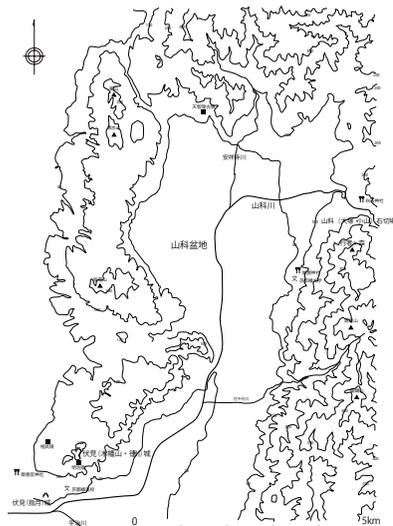
山科の石切場から伏見城に運んだなら、ほぼ山科盆地を縦断して石は動いたことになる。この区



写真2：行者ヶ森の残石群（右奥に矢穴が見える）

間の移動に山科川水系の端から端までを利用した（地図）。重量物の石材を山、谷をこえる労力よりも、なだらかで起伏のない川を下る方がはるかに軽減される。しかも、川底はコロレールとなり、川原石はボールベアリングの役割をはたした。行者ヶ森の山頂からは直線で伏見に向かうと西の橋大を通過する方が距離は短くなるのだが、これもやはり、まずは頂上付近から行者ヶ森を半周するように上流に向かう山科・音羽川へ東に向かって落とした方が楽だった。

こうしたことは石切場と伏見城を調査する地元の方々がすでに語られていることである。橋大もこの調査に今ようやく加わろうとしている。



地図：伏見城と山科（大塚・小山）石切場の位置

# 山科カレッジ～山科をまなぶ～開催報告

## 京都橋大学 山科区

2013年9月24日(火)、京都橋大学と山科区は、大学の知や学生の活力を地域で活かし、山科区がますます発展することを期待して、地域連携に関する協定を締結した。この協定を記念して、2014年度に、京都橋大学と山科区との共催により、山科の歴史、文化、産業等を学び、体感していただける講座「山科カレッジ～山科をまなぶ～」を開催した。

### 第1回目

#### 「琵琶と山科

##### ～古典芸能の原点、街道のまち～」

日時：2014年7月19日(土) 14:00～15:30

場所：山科区役所大会議室

講師：小谷 昌代(弦楽ふるさとの会代表)

#### 1 四ノ宮と琵琶についての紹介

四ノ宮と琵琶の関係、歴史、四ノ宮琵琶を復興させようとする活動や四ノ宮地域の活性化の活動などについての紹介があった。

#### 2 紙芝居「四ノ宮物語」

紙芝居「四ノ宮物語」を琵琶の弾き語りを交えながら上演された。

#### 3 琵琶の演奏

四ノ宮琵琶の演奏、演奏に合わせて童謡が披露された。

### 第2回目

#### 「清水焼団地の見学と湯呑の絵付け体験」

日時：2014年8月2日(土) 13:00～15:00

場所：清水焼団地内

#### 1 清水焼の歴史等の紹介(於：清水焼の郷会館)

清水焼団地協同組合の谷口理事長から、清水焼および清水焼団地協同組合の歴史に関する説明があった。

#### 2 清水焼の見学(於：洛中洛外ギャラリー)

洛中洛外ギャラリーにて、清水焼の作品を見学し、清水焼で制作された洛中洛外図屏風などの説明を受けた。

#### 3 工房案内、清水焼製作の説明(於：コトブキ陶春)

職人による清水焼の製作風景を見学した。なかなか見ることのできない工房の中にも入り、実際に清水焼を焼く窯を見学させていただいた。

その後、清水焼の湯呑に絵付け体験を行った。

### 第3回目

#### 「山科と食」

日時：2014年9月8日(土) 14:00～15:40

場所：山科区内(芳治軒、はいから園農園)

講師：木下 達文(本学現代ビジネス学部教授)

#### 1 京菓子司芳治軒

まず、区役所を出発し、芳治軒を訪問した。店主の清水幸治郎氏から、山科と京菓子をめぐってお話があった。

#### 2 はいから園農園

続いて、はいから園を訪問し、同園の林光男氏から、山科なすと山科とうがらしの栽培について、お話があった。また、農園の見学を行った。

#### 3 京都橋大学木下教授による講義

それぞれの訪問先と移動中のバスの車中で、木下教授による講義が行われた。

### 第4回目

#### 「随心院の歴史と美術」

日時：2014年10月25日(土) 14:00～15:30

場所：随心院能之間

講師：小林 裕子(本学文学部准教授)

#### 1 随心院の歴史について

最初に随心院の歴史についての講義があった。難しいテーマだがわかりやすい語り口で講義が進められた。

#### 2 随心院の美術について

随心院の歴史について一通りの講義をされた後、それを踏まえて仏像をはじめとする美術品について、写真を示しながら講義があった。

A



山科カレッジリーフレット

### 3 随心院での講義について

随心院の庭園が見える会場で、美しい風景を楽しみつつも、参加者の皆さまは真剣に講師の話に聞き入っていた。

### 第5回目

#### 「山科と忠臣蔵」

日時：2014年11月8日（土）14：00～15：30

場所：山科区役所大会議室

講師：進藤 秀保（大石神社宮司）

#### 1 大石神社の歴史について

最初に大石神社の歴史に関して、戦前に設立に至った経緯や、大石神社の社紋が左二つ巴になっていることなどについて説明があった。

#### 2 赤穂事件について

次に赤穂事件について、その原因について、時代背景を交えながら、いくつか原因とされる説についてお話があった。また、山科に大石内蔵助が隠棲するに至った背景についてのお話があった。

#### 3 忠臣蔵について

続いて、赤穂事件を題材にした忠臣蔵についての歴史のお話があった。また、忠臣蔵はあくまで物語であり、赤穂事件という歴史上の出来事の史実と異なる部分も含んでいることについての言及もあった。

#### 4 赤穂事件と忠臣蔵の今後

最後に、赤穂事件と忠臣蔵の今後について、日本人に長

く受け継がれてきた物語をどのように継承していくかが課題であるというお話があった。

### 第6回目

#### 「山科の未来を考える」

日時：2014年12月6日（土）13：00～15：00

場所：京都橘大学明優館 D202 教室

事例報告：小暮 宣雄（本学現代ビジネス学部長）

佐藤 友一（京都市文化市民局地域自治推進室

まちづくりアドバイザー）

登壇者：石黒 善治（山科区長）

細川 涼一（本学学長）

コーディネーター：木下 達文（本学現代ビジネス学部教授）

#### 1 事例報告

小暮現代ビジネス学部長より、「山科地域と京都橘大学との連携、あるいはアーティストと文化資源をめぐる実践—アーツマネジメントは「まちつかい」「まちがたり」を産む術になりうるか？—」をテーマに報告があった。続いて、佐藤まちづくりアドバイザーより、「市民参加の新たな形～区民と行政の協働はどこに向かうのか？～」をテーマに報告があった。

#### 2 山科の歴史についての紹介

石黒区長より、山科の歴史と発展について、写真を示しながらの紹介があった。

#### 3 パネルディスカッション

石黒区長、細川学長、小暮現代ビジネス学部長、佐藤まちづくりアドバイザー、コーディネーターである木下教授の5名で、山科区の文化振興、まちづくり、観光などをテーマにパネルディスカッションを行った。



第6回目「山科の未来を考える」パネルディスカッション

## 第3回橋セッション

# 醍醐地域との連携を考える —文化・観光・まちづくり—

### 報告 I

長瀬 福男 Nagase, Fukuo

総本山醍醐寺真言宗醍醐派宗務本庁公室室長

### 報告 II

中井 秀和 Nakai, Hidekazu

京都市伏見区役所醍醐支所地域力推進室まちづくり推進課長

### 報告 III

谷 亮治 Tani, Ryoji

本学客員講師、京都市文化市民局地域自治推進室まちづくりアドバイザー

### 総合司会 & コーディネーター

木下 達文 Kinoshita, Tatsufumi

本学地域連携センター長、現代ビジネス学部教授



会場の様子

10月15日(水)、本学管理棟第2会議室にて、地域との連携・交流企画「第3回橋セッション」が開催された。このイベントは、本学の地域連携センターが、地域社会や地方自治体・企業・NPO法人等との連携・交流をいっそう発展・促進していくことを目的に開催しているもので、第3回目の今回は、「醍醐地域との連携を考える—文化・観光・まちづくり—」をテーマに、3本の報告を受けた。

### ■報告 I

#### 「醍醐寺文化財の概要」

長瀬 福男 (総本山醍醐寺真言宗醍醐派宗務本庁公室室長)

#### 7万点以上もの国宝・重文を擁する醍醐寺

醍醐寺を開いたのは弘法大師空海の孫弟子である理源大師聖宝で、寺伝では874(貞観16)年の開創とされている。醍醐寺を象徴する五重塔は、国宝で、府内で最古の木造建築物である。

醍醐寺の特徴のひとつは、膨大な数の文化財を有していることで、国宝だけでも69,419点(19件)、重要文化財は6,522点(89件)にのぼる。その内容も、五重塔・金堂・薬師堂などの建造物が国宝・重文を合わせて16棟、五重塔の初重内部の両界曼陀羅図をはじめとした絵画が204点、薬師三尊像・阿弥陀如来坐像・弥勒菩薩坐像・金剛力士立像といった彫刻が31体、宋版一切経などの書籍・文書が75,678点と、きわめて多岐にわたっている。

こうした多彩な文化財が残された背景には、真言密教の教義の難解さがあると考えられ、空海の「真言宗の教えを伝えていくには、言葉だけでなく絵画が必要だ」という意味の言葉も残っている(『弘法大師御请来目録』)。

#### 各派に分かれていった真言宗

真言宗の宗祖である弘法大師空海以後、平安時代に既に十二の流派に分かれる。これらは事相(拝み方など、真言密教を実践する作法等)によるものだが、後に教相(教義の解釈)の違いでも分かれる。古くからの東寺や高野山、醍醐寺などの教相に対し、新しい教相を中心とした宗派が根来寺を拠点として誕生した。

根来寺が戦国時代に焼き討ちにあった後、その宗派に

属する大半は、京都の智積院を中心とした智山派と奈良の長谷寺を拠点とした豊山派に分かれた。この根来寺を中心とした新しい教相の宗派も、事相の面は醍醐寺に伝わる三宝院流憲深方（別名＝報恩院流、或いは幸心方）であったため、そこに属する多くの僧侶は根来寺で教相を学び、醍醐寺で事相の修行を行っている。

この関係は明治の初めまで続くが、神仏分離令による廃仏毀釈運動で打撃を受けた醍醐寺は、その後の政府の政策もあって智山派や豊山派と明確に分かれることになる。明治27年頃、醍醐寺は両者と「離加末協定」を結び約3,000の末寺が醍醐寺を離れることになった。その代わりに15,000円を智山派、豊山派から受け取っている。

廃仏毀釈の嵐の中、寺院に伝わる多くの宝物が寺の外へ流出し、中には遠く海外に渡ったものもある。そんな時代の中、醍醐寺も、所領を失い、外護者も無いに等しい状態であったが、「離加末協定」を結ぶことで開山以来の宝物を散逸させることなく、独自性を保つことができたのである。現在、7万点を超える醍醐寺の国宝、重要文化財は、このような犠牲を払って伝えられてきたのである。

### 火災から醍醐寺を守った人びと

大規模な火災が何度も起きたことも、醍醐寺にとって大きな試練だった。1939（昭和14）年に上醍醐を襲った山火事では、准胝堂や経蔵などが焼失したが、薬師堂は焼失を免れた。薬師堂の屋根は、とても優雅だが、檜皮葺きなので、瓦に比べて燃えやすい。現代のような消火設備のない時代に、なぜ薬師堂が焼けずに済んだのかを考えると、多くの人びとの尽力に思い至る。

このとき、寺は事前に周辺の木を刈るなどして対策にあたっていたが、結局、風にあおられて、かなりの建物が焼け落ちてしまった。その消火活動には、醍醐の村人はもちろんのこと、醍醐山の宇治側の麓の笠取村の人びとも参加し、最終的には伏見に駐屯していた軍隊まで出動した。多くの人たちが、谷川から醍醐山山頂まで水を運び、燃え広がる火を消し止めたのである。

今に伝わる醍醐寺の文化財を見ると、所有者である醍醐寺や代々の座主の努力はもちろんだが、こうした無名の人びとの力がなくては伝わらなかったものが大半だと思う。

だれが醍醐寺の文化財を守り伝えてきたのか。

醍醐三宝院の本堂の賽銭箱の格子は、永年、参拝者が賽銭を入れ続けたことで削られ、細くなっている。賽銭箱の周囲も、硬貨が当たり続けたことで、多数の傷が残っている。建物を傷つける行為は、誉められたものではないが、この賽銭のつけた傷は、多くの人が本尊に心を寄せた証であり、この傷をしるした信者の存在が無ければ、重要文化財である三宝院の本堂も快慶作の弥勒菩薩像も残らなかったかもしれない。

「弘法大師は今も生きて、わたしたちとともにある」と信じる人たち、地域で長きにわたって醍醐寺とともに暮らしてこられた方々。文化財も地域の文化も、そうした幾多の人びとの力を抜きにしては、守られ、発展することはなかった、と感じている。

### ■報告II

#### 「醍醐地域のコミュニティについて」

中井 秀和（京都市伏見区役所醍醐支所地域力推進室まちづくり推進課長）

#### 京都市の地域コミュニティ活性化について

京都市は、市政協力委員制度を約50年前に設ける一方、自治会・町内会に対しては、戦前の隣組が戦争遂行に加担していった歴史を踏まえ、一定の距離を置いていた。しかし、東日本大震災等を経て、共助の重要性が高まったことから、2012（平成24）年度に「京都市地域コミュニティ活性化推進条例」をスタートさせた。

京都市は、地域コミュニティ活性化のために、いろいろな制度を設けている。たとえば自治会・町内会の運営や地域の活性化に関する総合相談窓口として地域コミュニティサポートセンターがある。このセンターはマンション住民と地域との橋渡しもおこなっている。区民活動の支援や自治会・町内会加入促進のための補助金制度もあるので、ぜひ活用してほしい。

#### 醍醐地域の特徴

伏見区役所には深草・醍醐の2つの支所があり、醍醐支所管内の人口は約53,000人、世帯数は約23,000で、山科区の半分弱の規模である。

醍醐地域の特徴のひとつは、地下鉄醍醐駅前や六地藏

駅前には大規模な商業施設があるものの、昔ながらの商店街がないこと。したがって自営業者が少ないかもしれない。自営業者は、まちづくり活動の担い手として重要な位置を占めることが多い。事業所が比較的少ないことも特徴のひとつだと思う。また、「大学のまち・京都」にもかかわらず、醍醐には大学がない。

醍醐という地域は、東西を山に挟まれているという地勢的理由により地域内の距離が短い。その間を地下鉄東西線と幹線道路の外環状線が走り、南側にはJR線・京阪宇治線が通っているので、交通インフラは比較的整っている。地域内を徒歩で行き来しやすい上、醍醐コミュニティバスがくまなく走っているため区民に喜ばれている。

### 「醍醐はひとつ!」という一体感

醍醐地域は、昭和6年に京都市と合併・編入するまでは「醍醐村」だったので、古くからの住民には「醍醐はひとつ!」という一体感が強く残っている。その点、東山区から分区した山科区とは、住民の意識が少し違うかもしれない。

管内には小学校が10校あるが、かつての住民はすべて明治5年に開校した醍醐小学校に通った。10校にまで増えたのは人口が急増した昭和40年代以降である。

住民の自治組織も、10校区を単位につくられている。このまとまりは、他の行政区に比べて非常に強く、醍醐地域のコミュニティの最大の特徴だと思う。とくに防災・防犯・少年補導・交通安全といった暮らしの安全・安心に関する活動や、社会福祉協議会や民生児童委員会の活動等が非常に熱心に取り組まれている。

### 醍醐コミュニティバスは地域の結束力の象徴

こうしたまとまりの強さを象徴するのが醍醐コミュニティバスである。市営地下鉄東西線の開業により、醍醐地域外への移動は便利になったが、市バスが撤退して、丘陵地など地域内の移動はかえって不便になった。そのため、地域内の住宅地と各駅・商業施設・公共施設・病院等を結ぶバスを走らせ、買い物や通院の利便性を高めてほしいとの住民の要望を受けて、住民みずからバスを走らせることになった。

2004年から走り始めた醍醐コミュニティバスは、現在、「醍醐コミュニティバス市民の会」が株式会社ヤサカバスに運行を委託するかたちで運営されているが、行

政の補助金はまったく受けていない。唯一受け取っているのは敬老乗車証が使えるバス事業者に対する交付金だけで、運賃収入とパートナーズ（協力施設・団体）の運行協力金だけでまかなっている。

パートナーズの主なメンバーは、地域の医療・福祉機関や寺社、企業等である。とくに商業施設は、コミュニティバスがあることで集客率が上がるというメリットがある。

今年10年を迎えた醍醐コミュニティバスは、乗客数も500万人を突破した。地域住民も強い愛着を持っており、醍醐寺への参拝客が増える観光シーズンには、住民みずから駅前でコミュニティバスの案内に立っている。それだけ住民から愛されているわけであり、このバスを運行できるだけの結束力があるという意味で、醍醐地域の象徴のひとつだと思う。

### 今後の課題

残念ながら、醍醐地域も、高齢化が進行し、かつては強固だった組織が弱体化し、担い手も固定化しつつある。これは今後の課題であると認識している。

また、外環状線を境に、学区の様相も大きく異なっている。外環状線の東側は戸建ての持ち家が多く、西側は公営住宅（公団、府営、市営）が多い。公営住宅が多い学区では、自治組織の活動が低下傾向にあり、醍醐地域全体においてもコミュニティの力がやや低下しているように思う。

今後は、新しい自治の担い手として、大学やNPOの存在が重要だと考えている。京都橋大学におかれても、ぜひ醍醐地域との連携をよろしく願いたい。

### ■報告 III

#### 「まちづくりアドバイザーの観点から見る醍醐地域—これからの醍醐地域のまちづくりに向けて—」

谷 亮治（本学客員講師、京都市文化市民局地域自治推進室まちづくりアドバイザー）

### そもそも、まちづくりとは？

まちづくりアドバイザーは各区役所・支所に配置されており、市全体で14名となっている。わた

しはまちづくりアドバイザーになって4年目で、現在、醍醐支所を担当している。専門のコミュニティ論・住民参加のまちづくり論を活かして、貢献していきたいと考えている。

そもそも、まちづくりは何のためにやるのか？ 万物は壊れ、移り変わる。人は必ず老い、まちも放っておけば必ず「望ましい状態」ではなくなる。

人は、緩やかな変化には苦痛を感じにくいだが、急激な変化には痛みや苦しみを感じやすい。まちづくりにおいても、それぞれの地域では「自治会活動を担う世代を交代し続ける」「住民が転出するたびに自治会の新規加入者を増やし続ける」等のメンテナンスをすることで、急激な変化を防止している。

このように考えた場合、まちづくりとは、一度のプロジェクで終りではなく、生きている限りやり続けなければいけないものだといえる。例えば先の報告でもあったように醍醐寺が長年信仰を集めているのは、醍醐の人々がきちんと手をかけてメンテナンスを続けてきたからだ。まちも、醍醐のまちの人たちが頑張ってメンテナンスしてきたから今もこうして受け継がれている。その積み重ねを尊重する必要がある。しかし、そういう営みは外からは見えにくいので、うかつに扱いがちであるが、そこにこそ尊重する意義があるということを忘れてはいけない。

### 地域・行政・大学が連携する意義とは？

この考え方を応用すると、まず、そのまちがどういう状態で、何が「望ましい状態」なのかを考えなければ、正しい手は打てないだろう。自治会の支援であれ、イベントであれ、名産品づくりであれ、そのまちの人々の思う「望ましい状態」を維持するための、そのまちに合った取り組みでなければ、逆にまちを荒れさせる原因になるかもしれない。

もし地域・行政・大学の連携に意義があるとするならば、それぞれ単体ではできないメンテナンスを、相互に研究・開発・実験・運用していくことだろう。

### わたしたちに問われていること

しかし、「地域の課題」という言葉は、うかつに使うべきではない。なぜなら、地域の問題は、人によってそれぞれ見方が違うからだ。

問題とは「こうであってほしいのに、そうっていないこと」であり、課題とは「問題を解決するためにしなければいけないこと」である。高齢化や若手の負担増は、住民にとって本当に「問題」なのか。住民はまちがどうあるのが望ましいと思っているのか。それを考えなければいけない。

この先、日本全体の人口減少と高齢化が進めば、若年労働者が都心回帰し、子どもが減り、醍醐を含む郊外のオールドタウン化が起こるといわれている。その場合、住宅は老朽化・無人化し、空き家も増える。しかし、それが問題かどうか、望ましいかどうかは地域の人たち自身で決めることだ。

したがって、醍醐地域に関わる住民や大学は、何を「望ましい」と願うのかが問われる。「現住民が住み続けてよかった」だけでなく、「これからもたくさんの人が住み続けたいと思って転入し続ける」まちになり、新しい住民が補充され続けることが、まちのかたちを維持するものだとすれば、相応の手を打つ必要がある。

そのためにまず必要なのは「仕事」と「住まい」だから、SOHO、シェアオフィス、シェアハウス、コレクティブハウス、血縁者以外による二世帯住宅等が発達するかもしれない。シェアサイクルやシェアガーデン等、地域でシェアする財産もたくさん必要になるだろう。

何よりも、こうした営みを手入れする人びとが必要だ。自治会、NPO、まちづくり会社、そして、このセッションに集っている私たちの連携も、さらに進化する必要がある。「望ましい状態」を維持するために、どれだけの労力が払えるのかが問われる。

もちろん、無理はできない。しかし、何もしなければ望ましい状態が崩れていくのは確かだから、醍醐に関わる住民や大学の関係者一人ひとりが、まちを望ましい状態にしていくために、どこまで願って、何をするのかを考えなければ、地域連携の議論は難しい。みなさんがそこを考え、実行していく過程に、まちづくりアドバイザーは寄り添っていきたいと考えている。

## 京都モダニズム建築を訪ねて 第16回\*

\*文化政策研究センター広報誌「News Letter」からの連載回数を引き継いでいる

# 淡交社ビルディング

河野 良平 Kohno, Ryohei

本学現代ビジネス学部准教授



写真1：西側外観。西日除けに取り付けられたアルミ製のスクリーンで全面が覆われている。(筆者撮影)



写真2：アルミ製のスクリーン。見付35mm見込60mm、間隔も35mm。2つの袖壁の間に20本ずつ設置されている。(筆者撮影)

今回紹介する建物は「淡交社ビルディング」(1968)である。北区の堀川通り沿いに建てられた6階建てのオフィスビルで、1977年に増築されている。設計者は建築家・谷口吉郎(1904～1979)である。生まれは石川県金沢市で、九谷焼の窯元の家に育った。昨年オープンした京都国立博物館・平成知新館(2014)、豊田市美術館(1995)やニューヨーク近代美術館新館(2004)の設計者である建築家・谷口吉生(1937～)の父と言った方が分かりやすいかもしれない。両者に共通するのは、徹底的に無駄を省いたシンプルなデザインと抽象的な構成によって表現される日本的な美しさである。まずはその辺りに注目して、この建築を見ていきたい。

堀川通りに面した西側の外観で目を引くのが、ファ

サード(建物の正面)を覆っている縦格子によるスクリーンである(写真1)。機能的には西日を遮るためのものであるが、京都の町家等でもよく目にするモチーフであり、谷口の他の作品にもしばしば見受けられる。見付35mm、見込60mmのアルミ自然発色の角パイプが、見付と同じ35mmの間隔で並んで(写真2)、素材本来の風合いを生かすことが意図されている。スクリーンの後ろにはコンクリート製の袖壁とスラブがグリッド状に構成されていて、直交するグリッドも障子のような日本的なモチーフを連想させる。特に増築前の西側外観の夜景写真を見ると、袖壁とスラブに囲まれた部分が正方形に凹んでおり、横に5列、縦に4層分の合計20個の正方形が白く浮かび上がって見える。さらに前述のス

クリーンが6階部分にも張り出すことで、全体を大きな一つの正方形で覆っているように見える。断面詳細図からざっと計算したところ、袖壁のピッチは2750mmで5列の合計が13750mm、高さ方向は各階の階高3400mmの4層分に5階手摺部分900mmと1階垂壁部分400mmを加えた合計が14900mmであった。現在は北側に袖壁4列分増築されているので、アルミ製のスクリーンは横長の長方形に見えるのだが、袖壁とスラブに囲まれたグリッドは踏襲されているので、スクリーンの後ろには合



写真3：1階エントランスホール内観。床のタイルと壁やエレベーターの縁のラインが揃っている。(筆者撮影)

計36個の正方形が隠されている。これだけ大きなファサードになると都市的なスケールとなってくるのだが、直交した正方形のグリッドは京都の町の碁盤の目状の街路もイメージさせる。このように西側の外観部分だけ取り出しても、抽象化された日本の伝統美が二重にも三重にも重なり合っているように思われる。

次に1階のエントランス周りは、近づいたとき人々の目に触れる建物の顔のような場所である。入口周辺のショーウィンドウは屏風のように少しだけ折れ曲がっていて、来る人を招き入れるような配慮が施されている。エントランスホールの床は真黒タイル、壁にはスウェーデン産赤御影、天井には杉板と、異なる種類の材料が適所に配されているのだが、それらの目地がことごとく一

致している様子には圧倒される(写真3)。年月を経ても色褪せない素材自体の良さ、それらを組み合わせることから醸し出されるハーモニー、そしてそれらを知的かつ緻密に構成することで、谷口流の日本的な美が創り出されるのであろう。

機能面を見ていくと、淡交社ビルは主にオフィスとして使用されている建物であるが、1階には書店、茶道具販売店と茶室等がある。淡交社は裏千家とのつながりが深く、建築や出版を通して茶道に関する情報を発信している。この建物にある茶室は「好文庵」と呼ばれ、土間席と四畳台目席を組み合わせた茶の湯の空間である。このような形式の茶室は「(前略) 畳席と椅子席を同じ空間に配したもので、畳席が能舞台のように位置づけられ、椅子席から点前をながめられるようになっている。茶の湯の心得がない者や外国人にも配慮したしつらいで、現代に適応した茶の湯のありかたを前向きにとらえたうえでの提案だった」<sup>1</sup>とされ、谷口の他の作品にも見られるものである。

谷口は34歳のときドイツに出張し、古典主義建築の建築家シンケルの作品と出会う。その体験が谷口の作風を変えるきっかけになったと言われている<sup>2</sup>。幼少の頃から日本の伝統美に接しながら成長し、モダニズムと海外の古典建築を学んだことが逆に日本建築への理解を深め、谷口独自の美意識を切り開き育んだのであろう。淡交社・建築部の竹中部長にお話を伺ったところ、淡交社ビルの現場施工時には原寸の図面で打合せを行い、事務所には材料のサンプルが所狭しと置かれていたそうである。打合せ後、徹夜でスケッチを描き図面を訂正し、また翌日打合せをするという熱心さであったそうだ。建築に対するひたむきな姿勢と情熱が、端正な谷口建築を支えていたのである。

今回取材するにあたり、淡交社建築部・竹中勤部長には快くご協力頂きました。書面を借りて厚くお礼申し上げます。

<sup>1</sup> 藤岡洋保「淡交社ビルディング」『谷口吉郎の世界 モダニズム 相対化がひらいた地平』1998、p.160

<sup>2</sup> 藤岡 前掲書 p.14

## 人が集う“まち”と駅を、もっと楽しく、もっと元気に！

学生と地下鉄の駅のコラボレーションが生み出すアート空間

ゲスト

**吉田 治英** Yoshida, Haruhide

株式会社 GK 京都相談役、京都精華大学客員教授

**水川 耕兎** Mizukawa, Koji

京都市交通局高速鉄道部営業課営業推進係長

聞き手

**河野 良平** Kohno, Ryohei

本学現代ビジネス学部准教授



河野准教授（左）、吉田氏（中央）、水川氏（右）

### 9つの駅で、9つの大学の アート作品を展示

**河野** 京都市営地下鉄は、「若手職員増客チーム」による「燃え燃えプロジェクト」や、「太秦萌」をはじめとした“萌キャラ”など、斬新な取り組みが話題になっていますが、きょうは大学と連携した「駅ナカアートプロジェクト」についてお話を伺いたと思います。

「駅ナカアートプロジェクト」は、学生のアート作品で地下鉄を盛り上げようという取り組みで、現在は、本学を含む京都の9つの大学の学生が地下鉄の9つの駅の構内で作品を展示するスタイルとなっています。このプロジェクトが始まった経緯は？

**吉田** わたしが相談役を務めるデザイン会社のGK京都は、以前から地下鉄のポスター制作などに関わっていたので、ちょうど地下鉄が開業30周年を前にしたときに、水川さんに「何かやりませんか？」と持ちかけたんです。

**水川** ええ、われわれとしても「このまま赤字続きではいけない。何か思いきった取り組みで地下鉄を活性化し、赤字解消の決意を見せねば」と思っていましたので、吉田さんが提案してくださった「駅ナカアートプロジェクト」の事業を2011（平成23）年から始めました。実際に開催したのは2012（平成24）年の春です。

**吉田** 初年度に参加したのは、京都工芸繊維大学、京都府立大学、それに、わたしが客員教授としてプロダクトデザインを教えている京都精華大学の3大学でした。

### 大学の枠を超えて、地下鉄の活性化に挑む

**河野** なぜ大学とのコラボレーションを提案したのですか。

**吉田** 何年か前に、伝統工芸の関係者が集まる研究会で、「花見は一時のもの。ブルーシートに紙コップは不粋だ。

高品質で、かつ、はかなく消える花見をやる」という話になって、「高品質な虚しさ」をテーマに、紙コップに漆を塗り、友禅のステンシルで花柄のワサビをつくり、そのワサビで刺身を食すという花見を、円山公園でやりました。

つまり、「円山公園の花見といえばブルーシートに紙コップ」という“常識”を壊したかったんですね。そうすると新聞なども取材に来てくれて、翌年から円山公園ではブルーシートの使用が禁止されました。伝統工芸の分野でそういうことができたのだから、学生も大学の枠を超えて集まることで何かできないかなと思ったわけです。水川 京都には「市民のみなさまのための地下鉄」と「地下鉄沿線の芸術系の大学」があって、地下鉄は赤字で苦しんでいるし、芸術系大学はアートを学ぶ学生がその力を発揮できる場を求めている。そこで、各大学に「地下鉄なら場所を提供できるので、地下鉄の活性化という目的を持って参加してほしい」とお願いしたら、「そういうことなら利害関係を考えるべきではないし、学生も自由に力を発揮してほしい」ということで参加してくださるようになりました。

吉田 で、実際にやってみたら、とてもおもしろくて、乗客の反応もよかったので、「来年も継続できたらいいね。京都は大学が多いけれども、学生の取り合いをするよりも『大学同士でもネットワークが組めるんだ』と打ち出したほうがいい。参加する大学を増やそう」という話をしました。

ただし、すべての大学を対象にするわけにいかないのでも、美術系の学科・専攻がある大学に呼びかけたら、翌年から一挙に9大学に増えたんです。大学を説得しに、足を棒にして回ってくれた水川さんの功績大です(笑)。

## 京都だからこそ、小規模だからこそ

河野 「駅ナカアートプロジェクト」が成立しているのは、京都の地域性と関係があるのでしょうか。

吉田 同じことを東京でやろうとしても、たぶん無理でしょうね。あれだけ膨大な地下鉄網のなかでは、仮にやっても埋没してしまう。その点、京都は、ちょっと声をかければ9大学の連携がとれるし、企業も参加してくれる。ネットワークの組みやすさが京都のよさだし、京都はそれが可能なサイズのまちだと思います。

水川 京都の地下鉄はわずか2線で、31駅しかなく、大阪や名古屋に比べても圧倒的に小規模ですが、だからこそできるというか、小規模地下鉄のメリットですね。

吉田 それと、もうひとつの成功要因は、「大学の宣伝ではなく、京都の自分たちの足である地下鉄を活性化するための取り組みなのだ」という“錦の御旗”を死守してきたことではないでしょうか。だから大学も企業も行政も力を合わせる事ができたという気がします。

河野 企業が参加するようになった経緯は？

吉田 京都といえば、とかく伝統産業がフューチャーされますが、実は島津製作所や堀場製作所といった大企業がけっこうあって、そうした企業はインハウス部門でも地道にものづくりをしています。そういう企業内のデザイナーに参加してもらったほうがおもしろいし、予算の面でも協賛金や助成金を確保する道が開ける。そうすればプロジェクトの可能性が広がるだろうと思って、まず個人的なつながりのある企業内デザイナーに声をかけました。

水川 そういう会社が協賛企業として参加して下さるようになって、最初は島津製作所と堀場製作所とGK京都の3社でしたが、現在は株式会社インシダ、オムロン株式会社、株式会社サンエムカラーが参加してくださっています。

吉田 いまは学生の作品に対して企業内デザイナーからコメントを述べてもらう程度ですが、将来は学生とデザイナーが組むとか、大学の枠を超えて学生同士が組むとか、そういうクロスオーバーができたらいいなと思っています。

## “萌キャラ”が表現する地下鉄のポリシー

河野 地下鉄の“萌キャラ”の「太秦萌」には、家族構成や誕生日、星座、血液型、部活といった細かい設定がされていると聞きました。そういう作り込みがあるから、「太秦萌」という造形にある種のリアリティが生まれ、乗客の話題にもなるのかなという気がします。

というのは、映画監督の宮崎駿さんも、登場人物の、それこそ画面に出てこないような細かい背景まで設定して、アニメーションをつくりあげるのだそうです。それがスタジオジブリの作品の質を高めていて、現代のように“リアリティ”が求められる時代に、広く人びとに受

け入れられているのではないかと思うのですが。

吉田 たしかに、単にキャラクターをつくるのではなく、そこに物語性を付加しないと、リアリティは生まれてこないと思いますね。「太秦萌」にしても、彼女の身長や体重、家族構成、父と母の出会い、いとこの「太秦その」や幼なじみの「松賀咲」「小野ミサ」といった背景をしっかりと作り込むことで、現実感が生まれて、見る人に親しみを感じてもらえる。両親の出会いなんて、表面には出てこない物語ですが、そういう目に見えないところをしっかりとつくるのがリアルさにつながるのだらうと思います。

水川 「太秦萌」は、最初は予算がなかったので交通局の職員の家族がデザインしたのですが、一連のキャンペーンを担当してくださっている GK 京都のスタッフの方が、地下鉄のコンセプトをしっかりと打ち出せるように、キャラクターを作り込んでくださいました。片手間でつくと安っぽくなりますが、しっかり丁寧につくったことで、地下鉄が大切にしている「安全性」や「正確な定時運行」というポリシーを、キャラクターを通して間接的に表現できるようになったと思います。

ちなみに、「太秦その」は、京都学園大学の公式キャラクターでもあって、交通局とのコラボレーションで制作したんですよ。京都学園大学の「京都太秦キャンパス」は、地下鉄の太秦天神川駅から徒歩3分ですから、その開学記念として。

河野 それはおもしろい（笑）。本学と柳辻駅のキャラクターもつくってもらえるのでしょうか。

水川 ぜひ、つくりましょう（笑）。

吉田 「橋」はキャラクターのネーミングとして使えそうだし、スタッフも意欲を燃やすと思いますよ（笑）。

## プロジェクトは学生が「現場」を知るチャンス

河野 「駅ナカアートプロジェクト」に学生が参加する意味はどこにあるとお考えですか。

吉田 現場を知る大きなチャンスだと思います。学内で制作していると自己表現に終始しがちで、「これはいい」と自己満足に陥ったりしますが、駅の構内で展示作業をしていると通学中の子どもたちに話しかけられたりする。作品に対する子どもの反応を見ることができるし、学生自身も「子どもたちから声をかけられて、すごうれし

かった」と話しています。それこそが、まさにわたしの意図したことでした。

それから、わたしは京都府の丹波地域の活性化プロジェクトに取り組んでいて、2014年は「道の駅」で販売するスイーツのパッケージデザインを、わたしの学科の学生たちでプランニングすることにしました。そうすると学生たちは必然的に、地域でスイーツ開発に取り組んでいる年配の女性や事業者の人たちと対話をしなければいけない。実際に話し合ってみると、一所懸命に熱意を語ってくれる人もいれば、「パッケージにかかるコストは20円しかない」と厳しい条件を突きつける人もいます。そういう現場を知れば、学生はひしひしと地域の問題を感じる。そんな活動のなかで学ぶことは、とても大きいと思いますね。

河野 地域のオリジナルのスイーツをつくりたいという熱い思いや、コストに対する厳しい要求というのは、まさに現場そのものですね。

吉田 しかも、デザインには機能評価のような定性がないので、自分はいいいと思った作品でも、就職先の上司やクライアントに評価されないかもしれない。デザインの世界とは、そういうものですから。

河野 学生が現場を知って、なおかつ「おもしろい」と感じる事ができたら、プロジェクト自体も成功するかもしれません。

吉田 その意味では、「駅ナカアートプロジェクト」においても、企画会議に学生が出席して、一緒に考える事ができたら、もっとおもしろいし、学生にとってもプラスになるでしょうね。

## 人口減少時代にむけた 練習としてのプロジェクト

河野 地域の活性化の話が出ましたが、最近、越後妻有や直島など、過疎化が進む地域でアートイベントを開催する事例が増えています。

吉田 これからは人口減少時代で、いま1億2000万人の人口が、40～50年後には約9000万人になると推定されています。「消滅可能性都市」という言葉も出るぐらいですから、過疎地域では「まちおこし」が喫緊の課題でしょうし、「まちをどうするか」は今後、必ずトレンドのひとつになります。「駅ナカアートプロジェク



**吉田 治英**  
東京教育大学（現筑波大学）芸術学科工芸・工業デザイン専攻卒業。松下電器産業、住宅設備機器研究所をへて（株）GK京都入社、現在相談役。住宅機器、家具、ガラス食器からボート、船外機、水上バイクまで幅広いデザイン活動に従事。現在は防災デザイン、まちづくりデザイン活動にも参画。平成26年度京都府産業功労者受賞。



**水川 耕児**  
大阪市立大学経済学部経済学科卒業。平成10年度から京都市に入庁。平成23年度の「地下鉄開業30周年記念事業」を担当した際に、吉田治英氏や大学・企業とともに「KYOTO 駅ナカアートプロジェクト」事業立ち上げに携わり、現在に至る。

ト」は、その時代を迎えるにあたっての練習のようなものですから、学生にも「卒業して地元に戻ったら、地元のプロジェクトをしろ」と話しています。

50年後に人口が集中するのは東京だけと言われていきますから、京都もこのまま安泰というわけにはいかない。地域をどうするかは、京都にとっても大きなテーマです。

**河野** たしかに空き家の増加や町家が消えていくといった問題が出てきています。「駅ナカアートプロジェクト」を通じて、まちづくりにまでつながるといいのですが。

**水川** 鉄道事業者にも同じことが言えまして、おかげさまで現在は前年度を上回る乗客数を記録していますが、そのほとんどは観光客などの外部要因だと思います。そうした数値に浮かれることなく、「まちのなかの駅をどうするか」ということを、鉄道事業者の責任として考えなければいけないと思っています。

たとえば「駅ナカアートプロジェクト」のような、一定の期間だけでも人が集まるような仕掛けをつくっておけば、それが結果的に、まちづくりに寄与することになるかもしれません。そういうところにも鉄道事業者として目線を据えねばと思います。

## 大きな可能性を秘めた地下鉄 & 「駅ナカアートプロジェクト」

**河野** プロジェクトの今後の方向性は？

**水川** 市バスも、地下鉄と並ぶ公共交通の柱ですので、2015年度はバス車両も含めた京都らしい事業をしたいと考えています。地下鉄が盛り上がってきたので、市バスも取り組まざるを得ない状況になっているんですね（笑）。

**吉田** 毎年、プロジェクト終了後に関係者が一堂に会して、市長から学生への感謝状贈呈式を行うのですが、2013年は、それまでの交通局の会議室という閉じた空間から京都駅地下街ポルタというフルオープンな空間に移して、多くの方々に見てもらうことができました。それはひとつの進化だと思いますが、もう少しマスメディアに取り上げられるような工夫が必要です。

それと、たとえば1つの駅で9大学が一挙に展示するとか、アート作品の横で音楽を演奏するとか、プロジェクトマッピングもやってみるといふふうに広がっていくと、「京都って、おもしろいことやるよね」と話題になるので、そういう戦略も大事だと思います。

地下空間なりの条件や制約はありますが、やってみて、結果的に「よかったね」となり、実績をつくれば、条件も少しずつ緩むでしょう（笑）。

**水川** 企業の方にももっと参加を呼びかけたいですね。

**吉田** 同感です。いまよりさらに産業界の人に参加してもらって、「産官学」の連携を強めたいと思う。作品の質にしても予算にしても、企業が参加すると、ぐっと広がるから。

**河野** 企業は、行政に比べて担当者の異動が少ないので、事業の継続性が高まるでしょうね。

**水川** それが結局、リスクの分散にもなります。われわれとしては、とにかく年に一度、学生さんが集まって、ワイワイと自由に楽しく、かつ貴重な経験になるように駅構内を使ってもらえれば、これに勝る喜びはありません。地下鉄にはまだまだ大きな可能性があるので、認知度のアップをめざしたいです。

**吉田** 10年ぐらい続けることができ、定着してしまえば、いまの「前例」が、やがて「義務」になるでしょうから（笑）、それまでお互いに頑張りましょう。（了）

## デザインを通したまちづくり

昨年度初めて「駅ナカアートプロジェクト」に参加したのだが、予想以上に楽しい経験をさせてもらった。我々のデザインした作品が実際の空間に設置されることで、少なからずその場所を変化させ、何か違った新しい空気感のようなものを持ち込むことができたのではないかと感じたからである。

このプロジェクトを通して我々にできることは限られているが、これまでの経緯や地下鉄という公共交通機関の持つ性格などを理解することで、作品の表現方法やコンセプトにも影響が現れてくるだろう。本学の場合であれば、柳辻駅周辺の町並み、歴史や地理的な特徴が関係してくるかもしれないし、多数の乗降客が利用することから想像すれば、観賞者参加型の作品を提案することも可能だろう。そうなれば、そこに何を描き、どのような材料を使い、どのくらいの大きさにするべきなのかは自ずと決まってくるはずである。逆に言うと、そのような視点を意識して作品を見てもらえば我々の意図が理解され、より深いところで観賞者とコミュニケーションが取れたことになるのではないだろうか。

コミュニケーションの点で言うと、まだまだ物足りないものがあると感じている。以前に比べ携帯やスマートフォンが普及し、それらを用いたコミュニケーションが生活の一部として欠かせないものとなっている。しかしその反面、人間同士のフェイス・トゥ・フェイスのコミ

ュニケーションが減ってしまったり、うまくできなくなっているような気がしてならない。それ自体はやむを得ないことかもしれないが、そうであればそれなりのコミュニケーションの仕方を応用して作品や作品作りに反映させることができないものかと考えている。普段学生たちと接していると我々の学生時代と変わらず、明るく活動的であったり、つまらないことでクヨクヨ悩んだりしており、人間自体に大きな変化はないように思える。要は、自分たちの一生懸命考えたアイデアやコンセプトをどのように伝えれば、見る人により分かりやすくかつ深く理解してもらえるか、ということになるだろう。そのときに普段日常的に使い慣れているもの、つまり携帯電話やスマートフォンのようなものを積極的に利用することで、よりリアルで現代的な提案ができるかもしれない。作品を通して現代的なセンスが発揮できれば、新鮮な時代感覚として感動や共感呼び、コミュニケーションの幅も広がるはずである。

今回、ゲストのお二人にお話を伺い、改めてプロジェクトのもつ意図や意義を認識し、その必要性を強く感じた。プロジェクトを直接見た方や参加した学生、この記事を読まれた読者の方々に作品を広くご理解頂き、アートやデザインを通して街や地域が活性化されることを切に願っている。

(河野 良平)

KYOTO 駅ナカアートプロジェクト2015 作品掲出期間：2015年3月7日(土)ー5月31日(日)  
京都の9大学の学生が、地下鉄の9つの駅をアートでジャック! (京都橘大学は柳辻駅担当)

つながる Vol. 6 (2015年3月20日)

発行：京都橘大学 地域連携センター

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

Telephone: 075-574-4186 Facsimile: 075-574-4149

http://www.tachibana-u.ac.jp E-mail: icps@tachibana-u.ac.jp



京都橘大学  
地域連携センター  
Center for Regional Collaboration  
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY